



コラム Column

拾い物から

佐藤 孝一

政策研では、4月の人事異動に伴ない、研究室の大規模な引越しがあつた。その際、要らなくなったと思われる雑誌、書籍が大量に捨てられていた。その中には、絶版になっているものや販売されていない書籍も含まれていた。何冊か拾ってきたが、その内の一冊は『農業総合研究所年報』（昭和24年10月25日発行）である。総研が創設されてから最初の年報である。その最初の年報は、研究所の沿革から始まり、研究のあゆみ、研究組織などが続いて書かれており、最後に附録として初代所長である東畑精一所長の総研開所式における挨拶が掲載されている。研究のあり方、存在理由などを模索しているなど総研創立当初の様子を窺い知ることができる。

また、『農業総合研究所年報』には、定例研究会についても掲載されている。政策研では、火曜日の午後に定例研究会が開催されている。この定例研究会には通し番号が附されており、もう直1900に到達しようとしている（2002年6月末現在、1894）。『年報』によれば、第1回の定例研究会が開催されたのは、昭和22年4月1日、報告者は東井金平氏、報告タイトルは「米國の基督教について」である。また、『総研三十年』には、「総研創設後毎週一回ずつ全員が集合して研究会をやるうじゃないかと決めた」と定例研究会をはじめた経緯が書かれている。その第1回開催以来、農政の著名な先生方の報告も数多くあり、

今日まで受け継がれている。研究の蓄積が相当なものとなっている。年報や年史は、総研を知る格好のテキストである。良い拾いものをした。

研究所については入省1年目の終わりぐらいだったと思うが、私はある先輩の研究員に「佐藤君が思っている総研はとっくの昔に終わってるんだ」と言われたことがある。どんな状況下で言われたか記憶は定かではないが、おそらく私が何か研究のことでぶつぶつ不満を言っていたのだらうと思う（若気の至り）。入省前から、総研については聞かされていたが、その総研のイメージが私の頭の中にあつたのである。

私が入省する前の総研の様子を知るすべは、年報・年史以外ではOBの方々や現在研究所に居られる先輩方々からのお話、年史などである。これまで、出張先や会議、懇親会の場で古き総研の様子を聞く機会が多々あつた。厳しいお話もあるが、いまでは想像もつかないような楽しいお話をイキイキと話してください。私は、そうした先輩方が話してくださいる内容もさることながら、生き生きと話してくださいる様子を見ていると楽しいし、好きである。

研究所が創設されてから56年、時代とともに変わってきたところもあるだらう。研究所の気風、研究への取り組み方など。また、一方で変わらないで残ってきたところもあるだらう。変わらないで残ってきたものを探し、今後も大事に受け継いでいくことも大切なことであると思う。

総研年史をひもとくと、多くのOB諸氏がそれぞれ、研究所での研究生活について語られておられる。OBの方々に限らず、古き時代の総研をご存知の先輩方には、今後も総研について大いに語って頂き、お聞かせ願いたい。今後の研究の励みになると思う。